

# ひょうご 選書

## 女社長、世界を翔る

藤浪芳子著



# 独自の視点で描く見聞録

どうすればこれだけ広い視野と深い洞察力を持てるのだろう。

神戸の女性経営者がビジネスや海外視察などで訪れた世界20カ国・地域の見聞録をまとめた。国ごとに、歴史や文化、観光スポットなどを写真を交えて紹介しているが、単なる旅のガイドにとどまらない。国民性や経済事情、日本との関係性なども独自の視点で鋭くかつ温かく描く。

著者は35年前、専業主婦から突然、父親の後を継いで電子制御機器メーカーの社長に就任した。2人の子どもを育てながら、一から社業を勉強し、下請けから脱却。得意の英語と行動力で、海外にも進出した。

昨年、社長を長男に譲り、現在は会長として地元経済界などでも活躍。3年前に自伝を出版し、本書は2作目となるが、筆致はますますよくなっている。

例えば、長年の取引のある韓国。自社のコピー製品のカタログが出回った事例を挙げながら、「日本人は、常に新しい技術を追い求め、真似をされることを覚悟して、前へ進まなければならぬ」とも、GDPの

矜持を述べている。

1991年以来100回は訪問したという中国は、社会の変化やビジネス現場の厳しさに言及しながら、世界第2の大国と1人当たりGDPは87位という発展途上の側面を巧みに使い分ける姿に、「したたかさを学ぼう」という。そして、中国に留学させた長男について、「突然の環境の変化をすべて受け入れ、吸収し、成長したように思う」と、母親の顔を見せる。女性ならではの見方も随所に。ベトナムでは男女の別なく働く女性のパワーを感じる一方で、サウジアラビアでは、自ら「アバヤ」という黒い装束を全

身にまとい、差別的な扱いを体験する。「この地の女性の地位の低さに大変なカルチャーショックを受け、帰国後三か月ほどは立ち直れなかった」と書く。

ドイツは「落ち着いてはいるけれども少々活気に欠ける。アジアは伸び盛りの青年とすれば、欧州は初老まじりの壮年か」と例えるなど、お国柄の表現も示唆に富む。

一読すれば世界の多様性とそれを受容する大切さに気づかれる。

評者 村上早百合・論説委員

(神戸新聞総合出版センター) 1512円